

本当の国際化とは

広島県 三次市立布野中学校 2年
丸川 海音(まるかわ かいと)

最近のニュース番組を見ていて、とてもショックを受けたものがあった。それは、「ヘイトスピーチ」と呼ばれるものだ。「ネトウヨ」と言われる急進派右翼による在日韓国・朝鮮人を罵倒するデモのことだそうだ。数百人規模のデモ隊が、聞くに堪えない罵詈雑言を叫んで都心を行進していた。この日本でこんな事が起きているなんて、とても信じられなかった。それまでも、中国や韓国の反日デモをニュースで見る機会があった。踏みつけられる顔写真や引き裂かれる日本の旗を見て、「なぜこんなことを！」と怒りを感じた。しかし、ヘイトスピーチを見た時感じたのは「やめてほしい」という悲しみだった。

その時、二年前のある出来事が脳裏に浮かんだ。それは、多くの客で混雑するコンビニエンスストアでの出来事だ。突然の怒鳴り声に、店を出ようとした僕の足は止まった。

「うるさい！ どうせ店のことなんかわかってないだろう。外国人は黙っておけ！」

怒鳴られていた店員さんには見覚えがあった。外見からは日本人としか思えなかったが、少したどたどしい日本語から察すると、外国の人だったのだろう。これまでに何度か対応してもらった店員さんだったが、僕が落とす釣りを嫌な顔一つせず拾ってくれ、丁寧な対応で感じのいい人だった。そんな店員さんが、若いスーツ姿の男性客に怒鳴られていた。他の客の会話を小耳にはさむと、商品が品切れだったらしい。明らかに店員さんの過失ではない。怒鳴り散らした男性客が憤然と店を出て行った後、僕も呆然として店を出た。その騒動のさなかも、何もなかったように店を出て行く客も多かった。

帰宅後、やっと我に振り返り考えてみた。男性客は、他の日本人の店員でも同じように怒鳴ったのだろうか。店員さんの名札を見て、「外国人は…」という言葉が出たのだろうか。一生懸命説明しようとする店員さんに対して、「黙っておけ」という態度は、外国人だから説明なんてできない、と決めつけていたからだろうか。そして、店員さんに非がないのは明らかなのに、他の客は、皆、無関心で、さっさと店を出て行ってしまったという、後味の悪い思いは何なのだろうか。

そのときふと、自分はどうだったのか、ということに気づいた。自分だって、ただの傍観者だった。そして、今平気な顔をして買って帰ったジュースを飲んでいる。子供だから何も出来るわけがない、と考えていていいのだろうか。責めら

れ、罵られていた店員さんから見れば、あの男性客に何も言えない、無様な日本人の一人として映ったに違いない。

その後の店員さんがどうなったのかはわからないが、数日後、その店に出かけた時には姿は見えなかった。そしてその後、その店員さんを見かけたことは一度もない。

この出来事は、あの男性客も、その場にいた客も思い出すことはきっとないのだろう。僕自身も、今回のニュースを見るまでは、記憶の片隅に追いやられていた出来事だった。でもあの店員さんはどうだろう。一生その人の心の傷として残り続けているのではないだろうか。そしてもしかしたら、罵倒した日本人や、何の関心も示さなかった日本人に対して、嫌悪感を抱いて生きているのではないだろうか。もし、あの時、誰かがあの人をかばう発言をしていたら、誰かと言わず、僕がそういう行動をとっていたら、あの人日本人への感情は変わっていたのではないだろうか。

ヘイトスピーチをする人や、反日デモ隊の人たちが、どんな気持ちなのかは、僕には想像することはできない。歴史の勉強をしっかりとしてみないと、様々な思想があることもわからないと思う。

しかし、今の僕にもはっきりとわかることがある。それは、罵られ、軽蔑の対象となっている人達に、何ら罪はないということだ。一人一人の人間の尊厳は、生まれた国が違って何も変わることはないはずだ。同じ人間として、命の重さは同じであり、差別されていい人間などいないはずだ。

これから僕は、小さな町での生活から、少しずつ広い世界へとコミュニティーを広げていく。その中で、様々な国の人と出会うだろうし、様々な考え方の人と出会うだろう。そのときに、偏った価値感や、国籍などの情報にとらわれることなく、同じ人間として、その人の内面をとらえることのできる幅広い心の持ち主でありたいと思う。二年前のあの時店員さんを救えなかった僕が、ここに本当の国際化とは何かを考え、行動できる大人に成長していくことを決意したい。